

桂園時代から原敬内閣へ～新しい時代の政治を求めて～

(<http://jugyo-jh.com/nihonsi/>)

I、はじめに～ 新しい時代の政治を求めて

(1) 目標を見失った日本＝「明治の終焉」へ

(2) 産業革命＝社会構造の変化⇒多様な階級・階層のさまざまな要求が
だされる

- ☆政友会…選挙権をもつ地方名望家を重視＋財閥などの資金援助も
- ★大蔵省など…緊縮財政による負債の縮減
- ★軍部…軍備拡張など

1889	帝国憲法制定
1890	第一回帝国議会
1894～5	日清戦争
1900	立憲政友会結成
1901	第一次桂内閣
1904～5	日露戦争
1906	第一次西園寺内閣
1908	第二次桂内閣
1910	韓国併合
1911	第二次西園寺内閣
1912	大正時代に 第三次桂内閣
1913	大正政変 第一次山本内閣
1914	シーメンス事件 第二次大隈内閣 第一次大戦開戦
1916	寺内内閣
1918	米騒動 原内閣
1921	原敬暗殺される
1925	普通選挙法 治安維持法

「大正デモクラシーとは、その出発点においては、「帝国」に成り上がった明治日本が、従来の構造では対応できなくなったことに由来して起こる運動の総体…さまざまな階層によって、旧来の社会構造と秩序に対抗して展開された運動であった。」

「各層が…「国民」を語り出し、「国民」と名指しされるにいたる。…「国民」が跋行的に、つまり不完全な形で形成されながら、藩閥に叛旗を翻す事態となっているといえよう。」(成田龍一「大正デモクラシー」)

(3) 日比谷焼打事件…排外主義的性格と民主主義的性格を持つ民衆運動

(4) 日露戦争後～大正にかけての時代とは

◎「従来の構造では対応できなくなる」時代

- ① 商工業中心・都市中心の日本に、それに応じた社会に<前回>
- ② 帝国主義の時代…植民地獲得、列強や民族運動との摩擦<次々回>
- ③ 思想・文化の多様性⇒「国民」意識の定着

富国強兵・立身出世・国家中心の価値観と、民衆の「客分意識」といった明治の精神構造から⇒国民意識の定着、個人主義、自由主義、人間の尊厳（ヒューマニズム）などの新時代に

◎「国民」の名のもと「さまざまな階層が、旧来の社会構造と秩序に対抗」

社会問題の可視化がすすむ…労働問題・小作問題・参政権・女性問題・部落問題、公害・衛生健康・貧困・住宅問題<次回>

◎こうした時代の変わり目のなかでの政治の変化<今回>

政府・官僚中心の強権的・権威主義的な藩閥政治⇒国民運動や議会を背景とした政党政治へ
⇒憲法自体の欠陥、明治国家の多元性・分散性は克服
＝国家統合はできたのか。

II、桂園時代～二大勢力の妥協と暗闘の時代～

(1) 桂園時代(1901～13)…陸軍・長州閥桂太郎と、立憲政友会総裁で公家の西園寺公望が交代しつつ、総理大臣をつとめた時代。

(2) 明治憲法の性格に起因する問題

政党政治を防ぎ維新以来の政治体制維持を図る制度設計⇒国家の多元性・分散性が課題に
⇒一方における国家の多元性・分散性と、他方での議会の権限＝政府予算案などを否決できる

- ① 桂（山県派）の権力基盤＝軍部・官僚・貴族院・枢密院
⇒自らの政策実現のためには、議会の承認が不可欠＝政友会との妥協が不可欠
- ② 西園寺(政友会)…衆議院の多数獲得⇒政策実現のためには政府との妥協が必要

(3) 政府と政党の対立と接近の経過

- ① 日清戦争前…憲法以前のやり方を踏襲したい政府と議会の影響力を拡大したい政党の衝突
⇒衆議院解散と内閣不信任の連続、政治の停滞が発生
- ② 日清戦争後…増税や予算承認と引き換えに鉄道建設などを実現＝政府と政党の結合がすすむ
⇒立憲政友会の結成

(4) 立憲政友会…1900、元老の伊藤博文が結成、憲政党(旧自由党)の代議士や伊藤系官僚が参加

- ① 1902 衆議院総選挙以来、1915まで院内多数派を維持

②1903 伊藤にかわって西園寺公望が総裁に、以後、西園寺と原・松田の三者による党務運営

③特徴…1)鉄道設置など選挙権を持つ地主(地方名望家)たちの利害を重視

2)衆議院での多数派を絶対条件とし、二大勢力の一角を占める。

3) 西園寺を首相として送り出す一方、桂とも妥協を重ね万年与党状態を維持する。

(5)桂園時代の開始…桂・原密約(1904)日露戦争終了時の国民の反発への対応への協力

①桂が後継首班に西園寺を推挙 ②政党内閣とは称しないなど条件付き ③元老の推薦を求めない

⇒1906年、第一次西園寺内閣の成立(桂園時代の開始)

(6)桂園時代～妥協と暗闘をくりかえしつつ、互いの利益実現を図る

①両者の対立、大正政変という形で爆発、②原による政友会内部の軍隊的手法でのしめつけ

(7)「二大勢力」時代

①桂支持勢力＝行政・官僚主導の旧来型・能率重視の政治を重視。議会とくに政党政治を嫌う。

・山県閥(陸軍、長州閥、(山県派)官僚＝内務省など、貴族院＝官僚OB)・中央倶楽部(御用政党)

②西園寺支持勢力＝衆議院の多数派＝立憲政友会、議会の多数派による政党政治の実現をめざす

・議員…財産による制限選挙により選出される＝主に地主ら地方名望家の利害を反映

③中間的、ないしその他の勢力

・海軍・薩摩閥、伊藤派などの官僚、民衆(一般農民・都市下層民)

・憲政本党(→国民党)(←都市の資本家や中間層)＝政友会との連合か、政府に協力かで対立

(8)桂園時代の歴史的な課題

①新しい時代が到来しているにもかかわらず、古いリーダー(元老・藩閥勢力)が力を持ち続ける。

⇒あらたなあり方(政党政治・民本主義など)の模索と、創業者(元老ら)の思い+既得権益の対立

②憲法体制における権力の多元性の克服の課題

1)「国民代表」としての衆議院(立法権・予算審議権)の存在感が強化

2)軍隊の独走の傾向⇒一方的な計画(「帝国国防の方針」)決定

3)権力の統合の困難さ⇒元老・天皇の高齢化など

(9)軍部の発言力の拡大

①日清・日露戦争を通しての勢力拡大

＝植民地・占領地での軍政、「満州」への居座り

②帝国国防方針(1907)の制定＝第一次西園寺内閣

・ロシア(陸軍)・アメリカ(海軍)を仮想敵

③陸軍は25師団、海軍は八八艦隊の保有をめざす。

・参謀総長・海軍軍令部長の協議で制定⇒天皇の裁可を得て内閣総理大臣に下付。

・首相は部分的な閲覧を許されるのみ、財政措置を求められる。

(10)国民の締め付け

①戊申詔書(1908)…価値観の多様化に対し新たな国家道徳目標を天皇名で提示

②地方改良事業⇒地方の「自助」努力要請、地域社会を行政町村中心に整理統合、農村の共同化

③在郷軍人会などの整備⇒軍隊の民衆化

④天皇制の権威維持のための過剰反応…大逆事件(1910)・南北朝正閏論(1911)

(11)『情意投合』(1911)…官僚閥と政友会の協力による政権の掌握・維持をめざす

⇒政友会は、大逆事件・韓国併合・南北正閏論などで政府を援助

石川啄木「時代閉塞の現状」

日本には今、「遊民」という不思議な階級が、次第にその数を増しつつあります。今やどんな僻村へ行っても、三人か五人の中学卒業業者がいます。そうして彼らの仕事は、父兄の財産を食い減すことと、むだ話をするだけです。わたしたち青年を取り囲む空気は、今やもうすこしも流動しなくなりました。強権の勢力は、あまねく国内に行わたっています。現代の社会組織はその隅々まで発達しています。——そうしてその発達がもはや完成に近い程度にまで進んでいることは、その制度の有している欠陥が、日一日明白になっていることによって知ることができます。(超訳：日比嘉高)

Ⅲ、大正政変とシーメンス事件～民衆運動の政治過程への登場～

(0)1912年7月大正時代への改元、明治に代わる「新しい時代の到来を予想させる」

(1)第二次西園寺内閣(1911～1912)…第一次と比べ政友会色濃厚な内閣

①不景気の進行と対外債務の累積下で厳しい財政運営⇒内部対立の深刻化

②陸軍の強硬な2個師団増設要求を拒否⇒陸相が単独辞職、後任を出さず内閣を崩壊させる

③第二次西園寺内閣崩壊

(2)第三次桂内閣と護憲運動発生

①元老会議の推薦を受け、桂「勅語」を得て組閣を実施(＝天皇の政治利用)

②反対運動発生…新聞・雑誌を通して拡散、全国化・国民運動化＝「閥族打破、憲政擁護」

③桂、新党結成による対抗をはかるが、多数派形成に失敗

④政友会も本格的な倒閣運動に⇒内閣不信任決議案提出

- ⑤桂、西園寺に詔勅をだし、政友会の沈静化をもとめるが、政友会首脳・拒否。
⇒数万の民衆による議院包囲のなか、衆議院議長大岡育造の説得で桂・総辞職を決断

(3)桂新党＝立憲同志会の創設

- ①桂太郎首相、新党計画を発表⇒国民党改革派や山県派官僚などの参加
- ②桂の死後、正式に結党(12月)、加藤高明総理
- ③山本内閣のときシーメンス事件攻撃を展開
- ④第二次大隈内閣与党に、加藤は副総理格外相⇒1915年総選挙で大勝、第一党に
- ⑤1916年、他の政党と合併⇒憲政会(のち立憲民政党)結成
- ⑥立憲改進黨(大隈ら)の流れ、都市ブルジョワジーの支持

(4)山本権兵衛内閣(1913～14)＝海軍閥・薩摩閥の中心人物、「閥族のルール」で首相に

- ①政友会の協力…四大臣以外は政友会員(入閣後入党も可)など
⇒閥族内閣への協力に反対し、尾崎行雄らは離党
- ②1)軍部大臣現役武官制の廃止＝予備役・後備役も可能に
2)文官任用令の改正＝各省次官や警視總監らは自由任用に
3)行政整理の断行 合計5300人の大幅な定員減
4)軍備拡張は陸海軍とも凍結
- ③シーメンス事件＝海軍高官による大規模な収賄事件の発覚
同志会の追求と言論界・院外民衆の運動の活発化⇒貴族院の反対で予算不成立
- ④1914年3月、山本内閣崩壊

IV、第一次世界大戦の中で～大隈・寺内内閣と外交～

(1)第二次大隈内閣(1914～16)の成立＝政党内閣と桂後継内閣の両側面、ポピュリズム的性格

- ①元老ら、二個師団増設など軍拡承認と「政友会退治」を期待し、大隈重信に組閣を命じる
- ②政党内閣としての期待も「超然内閣を拒否した護憲運動の勝利」との当時の評価
- ③旧立憲改進黨系を与党とする政党内閣⇒閥僚は第三次桂内閣のメンバー中心、官僚中心
- ④1914年7月、第一次世界大戦勃発…内閣が対独宣戦を決定、元老へは事後連絡ですます。
- ⑤「21か条要求」を中国側に提出＝中国のみならずアメリカも強く反発、英仏なども不快感
- ⑥1915年総選挙で大隈与党の大勝＝衆議院多数派を政友会から奪う(「政友会退治」実現)
- ⑦二個師団増設など軍拡予算の承認
- ⑧元老ら、大隈内閣の外交政策や元老無視の手法に反発⇒退陣を迫る⇒1916年退陣へ

(2)寺内正毅内閣(1916～18)…陸軍・長州閥、山県派の直系

- ①「拳国一致」を唱え、超然内閣を形成…政友会は是々非々主義で対応。
- ②臨時外交調査会＝外交での拳国一致をめざす、原や犬養も参加
- ③中国干渉政策を継続＝西原借款
- ④「シベリア出兵」(1918～22～25)の開始
→最大7万3000の陸軍派遣、バイカル以東のシベリアを占領するが完全な失敗＝敗北に終わる。
- ⑤インフレ対策に失敗＝米騒動の発生⇒責任を取って退陣

V、原敬内閣～本格的な政党内閣

(1)原敬政友会内閣成立(1918)⇒日本初の本格的な政党内閣

- ①陸・海・外をのぞく全大臣が政友会員、衆議院議員・平民・非藩閥
- ②「四大政綱」による積極的財政支出⇒ばらまきと大軍拡
- ③労働運動やメディアなどを攻撃、社会政策による再統合をはかる面も
- ④普通選挙法獲得運動に敵対⇒政友会に有利な選挙法を利用し大勝

(2)四大政綱＝大戦景気による税収増を背景とした積極財政・社会の基盤整備。

- ①「教育機関の改善充実」…中等・高等教育の充実
- ②「交通機関の整備」＝鉄道・道路・港湾の拡充
- ③「産業及び通商貿易の振興」＝産業発展のための諸施策、都市の振興
- ④「国防の充実」＝海軍八八艦隊の建造、陸軍21個師団、軍備の近代化

(3)地域開発にむけての積極的財政支出＝バブル化・インフレの要因に

- ①鉄道敷設法＝従来の鉄道路線を倍増⇒鉄道は文明を全国民へ普及させると主張
- ②鉄道、道路、港湾、堤防などの整備⇒地方名望層を基盤に
- ③都市の整備、高等教育の充実⇒都市名望層にも支持拡大
- ④選挙法改正…小選挙区制、直接国税3円(自作農上層)以上に拡大⇒普選に対しては否定的

⇒地方議会への普通選挙の導入は漸次すすめていく。

⑤財源⇒地租中心から消費税＋法人・個人の所得税へ移行

(4)社会運動に対する弾圧と懐柔

①労働争議の活発化に対する弾圧と懐柔

官営八幡製鉄所争議…一方では厳しい弾圧で組合を壊滅させ、他方で待遇改善を進める

②思想弾圧

1)白虹事件…筆禍を口実にメディア（大阪朝日新聞）を屈服させる

2)森戸事件…東京帝大・森戸辰男教授の研究を問題視⇒起訴

(5)社会政策の展開と社会の再統合…要求を受容しつつ、統治を再編

①内務省社会局を創設(1920)…社会政策・協調政策の方向を打ち出す

②生活・健康対策…結核予防法・トラホーム予防法・健康保険法、借地法・借家法・職業紹介所法

③労働組合法案や小作立法案制定を志向⇒小作調整法・労働争議調整法制定

④刑事訴訟改正案…人権擁護と取り締まり強化…黙秘権、捜査機関の強制捜査・権限拡大

(6)普選運動の否定…

①普選運動の全国的な広がり、国民集会・示威行為・議員への戸別訪問など

②憲政会・国民党、国会に普選法案を提出

③法案否決の代わりに衆議院を解散、「普選実施」を争点とし、運動を沈静化させる。

(7)1920年総選挙における大勝

①1919の選挙法改正…小選挙区制など農村部につよい政友会に有利な選挙制度に

②政友会の積極財政による地域利益を誘導

③イデオロギー選挙＝「普選脅威論」→普選支持派は社会主義をめざすものと攻撃

④国民の政治・文化意識の低さ・ポピュリズムを警戒⇒急激な変化を望まない有権者の支持

⑤山県らの危惧と一致＝内閣への協力を取り付ける

(8)原内閣と「外交」

①三一独立運動(1919)…徹底的な弾圧⇒斎藤実総督による文化政策の導入

②シベリア出兵…撤兵を模索、間島出兵・尼港事件もあり、アメリカ撤兵後も戦闘を継続

・間島出兵…1920、朝鮮人が多数居住する満州・間島省へ出兵

・尼港事件(1920)…シベリアニコラエフスクで民間人を含む日本人がソ連側ゲリラに殺害される。

③パリ講和会議…西園寺らを派遣。山東省の旧ドイツ利権の獲得を承認させる

(9)国民統合の強化＝総選挙での圧勝を背景に強力な政治運営が可能に

⇒憲法体制の多元化の克服＝国家統合の方向？

①軍部に対する影響力の強化…内閣主導でのシベリア撤兵の実施

②山県・山県派との関係の強化＝協力関係に⇒旧来の体制への妥協との側面も

③貴族院の分断、勢力の浸透＝大臣受け入れ、枢密院の勢力の弱体化

④組織よりも「原」という個人へ依存⇒硬軟交えた巧みな党運営など

⇒「原」以後の政友会分裂（＝政友本党の分離）

(10)原内閣の行き詰まり⇒原暗殺へ

①1920戦後恐慌の発生⇒不況の開始、積極財政の実現困難⇒有産者援助に比しての民衆への弱さ

②政友会党員の関係する汚職事件が表続発…金権政治との反発高まる

③宮中某重大事件…皇太子妃選定をめぐる事件＝山県らの策動を支持する

④1921/11 原首相、東京駅構内で刺殺される。

VI、おわりに～政党内閣の定着に

①1921高橋是清政友会内閣成立⇒政友会の内部分裂で崩壊、床次竹二郎ら政友本党を結成

②中間内閣の時代…国際協調・軍縮と普選実施への検討

1) 加藤友三郎内閣成立…元老らの、高橋(政友会)・加藤高明(憲政会)への不満が背景

2) 第二次山本権兵衛内閣…普通選挙を計画するが虎ノ門事件で総辞職に

③清浦奎吾内閣に反対し第二次護憲運動＝護憲三派(憲政会・政友会・革新倶楽部)の結成

⇒普通選挙実施をスローガンに選挙に臨み勝利＝加藤高明護憲三派内閣成立

④1925 普通選挙法・治安維持法制定

⑤護憲三派の分裂＝加藤憲政会内閣に、以後、議会第一党を首相に指名する慣例が定着

⇒政党内閣の「定着」(「憲政の常道」)(～1932)

<参考文献>

岡義武「近代日本の政治家」、伊藤之雄「原敬(下)」「山県有朋」、千葉功「桂太郎」
坂野潤治「近代日本の出発」「日本近代史」、武田晴人「帝国主義と民本主義」「日本経済史」
松尾尊兌「大正デモクラシー」、成田龍一「大正デモクラシー」、鹿野政直「大正デモクラシー」
金原左門「昭和への胎動」、江口圭一「二つの大戦」、季武嘉也「原敬」「大正社会と改造の潮流」
※高校日本史用図表（浜島書店・山川出版社・帝国書院）